

長崎県感染症発生動向調査速報

平成27年第52週 平成27年12月21日（月）～平成27年12月27日（日）

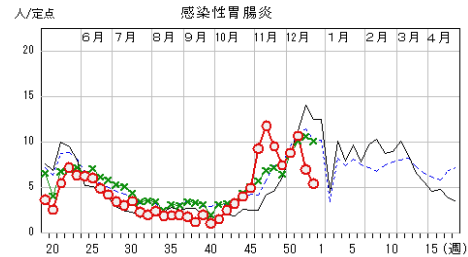
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

（1） 感染性胃腸炎

第52週の報告数は238人で、前週より69人少なく、定点当たりの報告数は5.41であった。

年齢別では、1歳（36人）、2歳（31人）、3歳（28人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、上五島保健所（13.00）、県北保健所（9.00）、佐世保市保健所（7.33）が多かった。

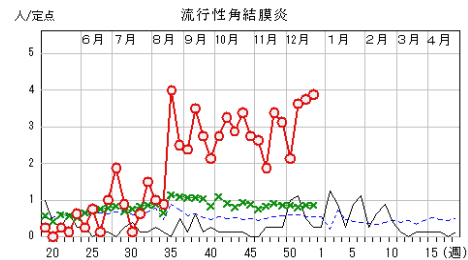


（2） 流行性角結膜炎

第52週の報告数は31人で、前週より1人多く、定点当たりの報告数は3.88であった。

年齢別では、30～39歳（7人）、20～29歳（6人）、1歳（2人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、西彼保健所（13.00）、長崎市保健所（4.00）、県央保健所（3.00）が多かった。

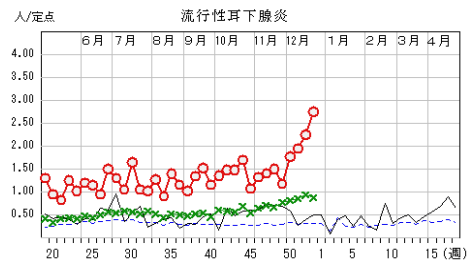


（3） 流行性耳下腺炎

第52週の報告数は121人で、前週より22人多く、定点当たりの報告数は2.75であった。

年齢別では、4歳（22人）、5歳（18人）、2歳（13人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所（21.50）、佐世保市保健所（5.67）、県南保健所（3.60）が多かった。



○ 当年(長崎県) 前年(長崎県)
× 当年(全国) 前年(全国)

☆上位3疾患の概要

【感染性胃腸炎】

第52週の報告数は、前週より69人減少して238人となり、定点当たりの報告数は5.41でした。杵岐地区以外から報告があがっており、西彼地区、五島地区、上五島地区及び対馬地区は前週より増加しています。また、県全体では前週の定点当たり報告数6.98より減少しましたが、依然として流行期にありますので、引き続き注意が必要です。

病原体サーベイランスにおいて提供された検体を解析したところ、ノロウイルスのGⅡ.3、GⅡ.4及びエンテロウイルスの一種であるコクサッキーウイルスA10型が検出されています。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早目に医療機関を受診させましょう。

【流行性角結膜炎】

第52週の報告数は、前週より1人増加して31人となり、定点当たりの報告数は3.88でした。壱岐地区、県北地区、上五島地区及び対馬地区以外から報告があがっており、佐世保地区、西彼地区、県南地区及び五島地区は前週より増加しています。また、西彼地区の13.00は警報レベル「8」を超えていますので、今後の動向に注意が必要です。

病原体サーベイランスにおいて提供された検体を検査したところアデノウイルスの遺伝子が検出されました。検出された遺伝子の一部を解析したところ、アデノウイルス54型と一致しました。現在更なる解析を進めているところです。

本疾患は、主にD群のアデノウイルスによる疾患です。涙液や眼脂で汚染された指やタオル類からの接触感染により伝播し、小児からお年寄りの方まで幅広く罹患します。潜伏期は8日から14日で、急に発症し、眼瞼の浮腫、流涙、耳前リンパ節の腫脹を伴います。角膜に炎症が及ぶと透明度が低下することがあります。さらに、新生児や乳幼児では偽膜性結膜炎を発症し、細菌の混合感染で角膜穿孔を起こすので注意が必要です。有効な治療薬はなく、対症療法が基本となります。感染力が強いため、眼分泌物はティッシュペーパーなどで除去し、直接手で触れないように気をつけましょう。また、手洗いを励行し、洗面器やタオルを共有せず、触れた場所をアルコール綿でよく拭くなどして感染防止に努めましょう。

【流行性耳下腺炎】

第52週の報告数は、前週より22人増加して121人となり、定点当たりの報告数は2.75でした。壱岐地区と上五島地区以外から報告があがっており、佐世保地区、長崎地区、五島地区及び対馬地区は前週より増加しています。また、対馬地区の21.50は警報レベル「6」の3倍以上の値となっていますので、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は2週間から3週間の潜伏期（平均18日前後）を経て発症し、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするウイルス感染症であり、通常1週間から2週間で軽快します。最も多い合併症は髄膜炎であり、その他髄膜脳炎・睾丸炎・卵巣炎・難聴・肺炎などがみられることがあります。感染経路は接触感染や飛沫感染ですが、その感染力はかなり強いので注意が必要です。ただし、感染しても症状が現れない不顕性感染もみられます。本疾患および合併症の治療は、対症療法が基本となります。

予防するにはワクチンが唯一の方法であり、有効な抗ウイルス剤が開発されていない現状においては、集団生活に入る前にワクチンで予防しておくことをおすすめします。

☆トピックス：インフルエンザを予防しましょう

インフルエンザの全国的な流行は、例年11月下旬から12月上旬頃に始まり、年が明けて1月から3月頃にピークを迎えます。本県では、1月から本格的な流行が始まり、以後患者数が急増して2月初旬から中旬にかけてピークに達する傾向にあります。今年は、今年の同時期と比較すると流行の立ち上がりは遅いですが、引き続き動向に注意しましょう。

インフルエンザは、インフルエンザウイルスを原因とする気道感染症です。他の原因によるかぜ症候群より重症化しやすい傾向がありますので注意を要します。感染経路は、咳やくしゃみの飛沫による飛沫感染と、飛沫等に含まれるウイルスが付着した手指で自分の眼や口、鼻を触ることによって成立する接触感染があります。1日から3日間の潜伏期間のあとに38度以上の発熱、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛、関節痛などの全身症状が突然現れます。これに続いて咳、鼻汁などの上気道炎症が起こり、約1週間で軽快するのが典型的なインフルエンザの症状です。呼吸器、循環器等に慢性疾患を持つ方は、その病状が悪化することもあります。小さなお子さんの場合、熱性痙攣や気管支喘息を誘発することもあります。

飛沫や接触により感染が成立するため、外出先から帰宅した際の手洗いの励行やマスクなどによる「咳エチケット」の徹底など、積極的な感染予防を心掛けましょう。

(参考) 厚生労働省 平成27年度 今冬のインフルエンザ総合対策について
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/influenza/>

(参考) 長崎県医療政策課 季節性インフルエンザ
<https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-hoken/kansensho/kansenshou/influ/>

季節性インフルエンザ予防啓発ポスター2015

※職場や学校、家庭等での予防啓発にご活用ください。

<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2014/04/1448972813.pdf>

